

今、このあとがきを米国・カリフォルニア州の自宅で書いている。

2018年秋にフルブライト奨学金制度で渡米し、カリフォルニア大学バークレー校の客員研究員に就任してから1年が経った。米軍問題をテーマに次作のドキュメンタリーを制作している。「国家と暴力」「国家と民衆」は、今の私の取材テーマだ。その核心には今も「戦争マラリア」がある。

「英代には戦争マラリアを学んだ者としての責任があるよ。それをどう社会に還元しながら生きるのか、考えないといけないよ」

浦仲の浩おじいさんが、学生時代の私に常々言い聞かせたこの言葉を忘れた日はない。もう二度と、国家に騙されないこと。戦争という愚行に加担しないこと。その方法は、拭い去ることのできない負の歴史からしか学び得ることはできないと信じている。

沖縄で既存の米軍基地に加え、自衛隊基地、そして辺野古・高江の新基地が配備され、琉球列島全体がますます軍事基地化されているからこそ、私は、軍隊の潜在的な恐ろしさと、軍民雑

居が招いた悲劇を、実際の歴史から国民が学ばねばならないと思う。爆撃でも戦闘でもなく、自国軍によってマラリア地獄に追い立てられた約3600人の死者たちは、今を生きる私たちに必死に問いかけているように思えてならない。

「私たちの死から何も学ばずに、またも同じ過ちを繰り返そうとしているのか」と。

強い軍隊によって守られたという意識が日本国民の間にどんどんと浸透していく、今の世の中だからこそ、戦争マラリアと初めて出会ってから10年が経つ今、この本を書かねばならないと思った。それが、浩おじいさんの言う「戦争マラリアを学んだ者の責任」だと思った。

この本の執筆にあたり、過去10年間の膨大な戦争マラリアの資料を読み返し、撮り溜めたインタビュー映像や動画を再生した。取材を始めた頃から書き始めた取材ノートは20冊以上にのぼっていた。そこには、ジャーナリストを目指して歩み始めた22歳の私自身、戦争マラリアを追って石垣島を駆け回っていた23歳の私、そして波照間で浦仲のおじいおばあたちと暮らし、サトウキビ農家になった24歳の私、そして報道記者として現場取材に明け暮れた私自身との対話でもあった。この10年間を振り返りながら、様々な思い出が駆け巡り、執筆しながら時に笑い、時に涙した。たくさんの人たちの「痛み」に触れる日々だった。

孝子おばあは家族9人を一度に失うという悲惨な体験を幼い頃に経験した。しかし、「人生で最も辛かった体験」は戦争マラリアだけではなかった。私ができることを知ったのは、波照間

に住み始めて3か月が経った頃だった。

浦仲家の書棚に『ホタルの日記』という本を見つけた。著者は、孝子おばあさんの4人の娘息子のうちの、三女・光代さんだった。

光代さんは、愛知県の大学で保育士と栄養士の資格をとり、看護師として長年働いてきた。仕送りに苦労する両親を気遣い、自費で進学したのだと言う。孝子おばあは「あの子は、本当におりこうさんだったよ。月に1、2回は必ずどうしているかと電話をくれた」と思い出を語った。愛おしそうに、遠い昔を懐かしむように。

「でも」と、おばあは言う。

「若くして死んでしまったさ」

光代さんの著書は、骨髄ガンの闘病記だった。

おばあとおばあを並べて一緒にページをめくった。「1992年5月12日」と記された写真が挟まっていた。再発後、ホスピスで過ごしていた頃だ。可愛らしい丸顔はおばあにそっくりだった。意志の強さを感じるその瞳は、浩おじいに似ていた。しかし、顔色がとても悪かった。

「末期で、医者もなにもできなかったのに」とおばあが言う。

撮影から1か月も経たない6月7日に、光代さんはこの世を去った。おばあさんの誕生日の翌日だった。

書籍の中に「父母へ」と書かれた文章があった。

「おばあ、これ読んで聞かせようか？」

そう、私はおばあにたずねた。

「いやあ…、わたし、涙が出るはずよ。でも、読んでみれっちゃあ」

その文章は、両親への最後の言葉にしてはシンプルすぎると思えるほどに短くまとめられていた。

お父さん、お母さん。四十そこそこで死ぬことになった私を残念がらないでください。
さい。

「よく生きた」と喜んでください。

おばあは、子どものような澄んだ瞳をじわりと潤わせたあと、涙を落とした。

家族の死という、あまりにも辛い体験をおばあは人生で三度体験した。一度は戦争マラリアで。二度は愛する娘を。そして浩おじい



浩おじいの法事の餅を手作りする孝子おばあさんと利子おばあさん。
ある時利子おばあさんに「孝子おばあさんはどんなお姉ちゃん？」と聞くと、
「普通のお姉ちゃんさ」と笑っていた（2017年10月波照間島）

が亡くなった今、おばあはまた一つ、人生で一番辛い日々の中にある。

88年という長い歲月の中で、たくさんの悲しみと痛みをおばあは経験しながら、大地を踏みしめ、畑を耕し、今日まで生きてきた。戦争マラリアを取材しようと島にやってきた私が、この10年間の取材で見つめたのは、過去の悲劇そのものよりも、むしろ、その後の人生を必死に生きてきた人々の姿であり、逞しさであり、命の尊さだったように思う。

2011年5月、波照間で暮らしていた24歳の私は、その日の取材ノートにこんな言葉を残していた。

「ドキュメンタリーを撮るということは、どうしても人を傷つけてしまう。それを一番私は恐れている。でも「心」というのは、きつと痛いという感覚をきちんといつも得られることが大切なんだ。麻痺して、何も感じなくなった時、心はきつと死んでしまっている。相手の立場で物事を考えていけば、相手の痛みも、私の痛みも、きつと必要最低限で済むと思う。

おじいおばあたちの心に包帯を巻いてあげられるような、そんな人に私はなりたいたい。みんなが口を揃えて「戦争はダメだ」「絶対に繰り返してはならない」「軍隊がいるから敵が来る」という言葉を、ひとつひとつ、私は心に染み込ませてゆきたい。ひとつたりとも忘れたら、軽々しくあしらったりしない」

私は、ある日、思い立ってこんな質問を孝子おばあにしたことがある。

「ねえ、おばあにとつて人生で一番楽しかったことはなに？」

ドキュメンタリー制作を通じて、おじいおばああの悲しみや痛みにはかり焦点を当ててきたので、たまには楽しいことも聞いてみようと思ったのだ。

するとおばあは、「ええ、なにかー、もうバカランヌウ(分らないよ)！」と声をあげて笑った。まん丸のほつぺたを膨らませながら。そして少し考え込んでから、こう言ったのだ。

「そうさねえ。今が一番ムツサハン！（楽しい）」

ある日突然、我が家に乱入してきたヤマトウピトゥー（大和人）の小娘である私と過ごす瞬間を「一番楽しい」と言ってくれたことは、私にとつての何よりも幸せだった。

取材は、体験者たちに残された命の時間との競争でもあった。

元海兵隊員のロバート・マーティンさんは昨年2019年2月24日、カリフォルニア州の自宅で眠りについた。波照間の西白保高保さんも昨年、私の取材を受けてくれたわずか2か月後に亡くなった。

また、生きているおじいおばあたちの中にある「記憶」との競争でもあった。波照間で取材した東田シモおばあは、私が波照間で暮らしていた時、時々、戦争マラリアの体験を語ってくれた。映画『沖繩スパイ戦史』の取材で、2017年秋、再び波照間に帰ってきた私は、シモおばあの自宅を訪ねた。シモおばあはすっかり歳をとっていた。耳が遠くなっていた。何よりも、私のことを全く覚えていなかった。

「ウランゲーヌアマスカヨー（浦仲家にいた娘だよ）」とベスマムニで私が説明をしても、「ガー



東田シモおばあと私（2017年10月波照間の自宅にて）

ン、バガラヌ。タイヌアママヤ？（分からない。どこの家の娘か？）と不思議そうに聞き返す。それでも戦争体験を教えてほしいと、カメラを回すが、シモおばあは記憶がうまく言葉にならない。

シモおばあは寂しそうに呟いた。

「ごめんども、頭には（戦争マリアの記憶が）あるけどよ…、もう、うまく言い切れんさー」

その言葉を聞いた時、私は波照間に滞在していた頃、シモおばあとおしゃべりをした他愛もない日々を思い出した。その頃におばあが教えてくれた戦争体験は、今、ビデオカメラの前で喋れなくても、私の中にちゃんと記憶として残っていた。

私はシモおばあの小さな手を握った。そしておばあは右耳のすぐ横でできる限りの声を張り上げて、こう言った。

「大丈夫よー、おばあ。私がよ、ベスマヌマラリアヌクトウヨ（波照間の戦争マリアのことを）映画にして、みんなに伝えるからね」

戦争マラリアを生きたおじいおばあたちが、戦後ずっと背負ってきた荷物を紐解いてあげたかった。私がそれを背負って、しっかりと歩く。だから、もう安心して私に預けてくださいな。もう二度と、あんな悲惨なことは繰り返さないから。私はそういう気持ちだった。

これが映画『沖縄スパイ戦史』のエンドロールのラストシーンになった。

しかし、取材を終えた今も疑問は残る。波照間の強制移住を指揮した山下虎雄こと、酒井清氏。彼について、波照間の体験者たちは、「涙が出るほど憎たらしい」「あの人のせいで波照間みんな死んだのに…。殺せばよかった」などと憎しみの思いを吐露した。浩おじい、戦後も繰り返し来島した酒井氏に「二度と来るな」と抗議文を突きつけた。これだけの被害を与えた人物への怒りは、遺族ならば当然のことだろう。

この男の正体を取材するなかで、私は自分自身を問うた。「もし、私が当時、彼の立場にいたら、どんな行動を取っていたらどうか」と。

戦時中、酒井氏は、私と同じ年頃の25歳の若者だった。戦後のインタビューで強制移住は「天皇陛下の命令だから」と平然と語っていたように、軍命を忠実に遂行した彼は、当時の軍の価値観で見れば、非常に優秀な軍人だった。軍国主義の元で教育され、陸軍中野学校でゲリラ・スパイの特殊訓練を徹底され、南海の孤島に特務員として送られ、そしてたった一人で住民利用作戦という日本軍の重要な作戦を遂行する任務を与えられたら、私は、どうするだろうか。

「私も、もしかしたら彼と同じ行動を取っていたかもしれない」

そう感じた瞬間、ぞっとした。「山下」という男と向き合うほどに炙り出されたのは、私自身の中にもある、おぞましい人間の弱さだった。

私たちの日常生活を見れば、様々な場面で私たちは「従属」している。職場ではやりたくない仕事も、「上司の指示だから」とやらざるを得なかったり、理不尽だと思っても「社会のルールだから」と従ったりする。意識の有無を問わず、私たちの自己決定は必ず外的要因に左右されている。75年前の日本軍からの「命令」であれ、現国会が次々と生み出す「法律」であれ、今後起こり得る自衛隊からの「協力」であれ、絶対的な権力を振りかざされた時、私たちは―あなたは、私は―果たして、どこまで抗うことができるのか。

「山下」は大本営の駒にすぎなかった。そして私たちも、いつでも次の「山下」になり得る。無意識のうちに、あるいは「正義」の名の下に率先して、残虐行為の片棒を担ぎかねない。

だからこそ、私たちの中にある普遍的な弱さを、今、一人ひとりが問わねばならない。

なお、中野学校卒業生たちが戦時中の沖縄本島で担った秘密戦と少年ゲリラ隊「護郷隊」については三上智恵さんの『証言・沖縄スパイ戦史』（集英社新書）をご参照いただきたい。本書と併せてお読みいただくことで、秘密戦の残虐な実態がより浮き彫りになるはずだ。

最後に、10年間にわたり、取材でお世話になった皆さんに心から感謝の気持ちを伝えたい。

石垣島の潮平正道さん、山里節子さん、大田静男さん、内間家のみなさん。波照間の浦仲家、

前加良家のご家族の皆さん。大田文章さん・貞子さん御夫妻。屋良部秀さん、東田シモさん、鳩間末さん、大嶺千代さん、西白保高保さん、銘莉進さん・好子さん御夫妻、金武榮保さん、金武正さん、美底千代さん、玉城功一さん、島村修さん、東金嶺健吉さん、白保昇さん、後仲筋正忠さん、南風見スミさん、西里スミさん、野原光栄さん、西島本米彦さん、野底光子さん。まだまだ書ききれないたくさんの方々にお世話になった。

映画『沖縄スパイ戦史』共同監督の三上智恵さん、橋本佳子プロデューサー、配給会社東風の皆さん、平田守カメラマン、比嘉真人助監督、鈴尾啓太編集マン、劇伴のROVO勝井祐二さん、そして、制作スタッフの皆さん。私を報道記者として育ててくれた沖縄の報道現場のみなさん。貧乏学生だった私を美味しい手料理で支えてくれた田中和子さん。大学院時代の恩師であり、尊敬するジャーナリストの野中章弘さん、吉田敏浩さん。二人がいらっしやらなかったら、今の私はいませんでした。

そして、私の夢を支え続けてくれる両親、家族、愛する姪の千鶴代、實智代。

1年以上締め切りを延ばし続けてしまったにもかかわらず、辛抱強く、また強い問題意識を持って出版を実現してくださったあけび書房代表の久保則之さん、編集にご尽力くださった清水まゆみさんにも、心からの感謝を申し上げます。

ドキュメンタリー映画『沖縄スパイ戦史』は2018年夏の公開以降、全国各地の劇場で上映され、これまで約3万人が観てくださった。キネマ旬報文化映画部門でベスト1位になるな

ど9つの賞をいただいた。国外では韓国、ドイツ、スイスの映画祭で上映され、今後は米国内でも上映が始まる。日本国内では自主上映が続いている。

先日、米国から孝子おばあに電話をして、海外での上映について伝えた。

「ワッペー、デージサッチャマー（あらら、大変だ）」と感激していたおばあは、

「でも、ベスマムニ（波照間の言葉）、みんな分らないでしょー」と心配した。

「ちゃんと字幕つけたから大丈夫だよ」と私が伝えると、おばあは、

「エーナア、ハナヨー、ダンドウナルシタヨー（そうか、あんたは何でもできるなあ）」と嬉しそうだった。

そしておばあは、「あい、ちよつと売店に行ってくるさーね」と言っ、受話器を放置してそのまま電話の向こう側に消えた。「え、ちよつと待って、おばあ！」と叫ぶ私を置いて、おばあはベスマムニで何かを言いながら、家を出て行った。きつと、いつものように草履をはいて。

電話口に取り残された私は、そのおばあらしさが、また可愛らしくて、一人で笑った。

孝子おばあ。おばあの人生を、その痛みを、喜びを、私に分けてくれてありがとう。

そして、波照間の風になった浩おじいへ。これからも取材を続ける私を、どうぞ見守っていただきます。おじいの言葉を胸に刻みながら、私は生きていきます。

プヤー、パイマー。

ベスマムマリアマクトウ、ナラヘタボリ、シカイトニーハイユー。

「おじい、おばあたち。波照間のマリアの体験を私に語り継いでくれて、本当にありがとう
いれします」

ジャーナリスト・ドキュメンタリー映画監督 大矢英代

2020年1月 米国カリフォルニア州にて